

# 租借地都市大連における『満洲日日新聞』の 役割に関する一考察

## —「大連彩票」の内容分析から—

栄 元

総合研究大学院大学 文化科学研究科 国際日本研究専攻

『満洲日日新聞』（以下『満日』と略す）は1907年11月3日に関東州租借地の大連で創刊された。大連において最初に創られた日本語新聞は末永純一郎の『遼東新報』（1905年10月創刊）である。『満日』創刊後、大連の新聞界は『満日』と『遼東新報』によって二分されていた。その後、1920年5月に、『大連新聞』が創刊され、三紙鼎立の状態となった。しかし、それは長続きせず、『満日』は1927年10月と1935年8月に『遼東新報』と『大連新聞』を相次いで合併することにより、大連さらに中国東北地域の日本語新聞界において独占的な地位を築いていた。

『満日』には、大連を中心とする中国東北各地方の日本人及び中国人社会の動向に関する記事が多岐にわたって掲載されているだけでなく、日本国内のメディアでは得ることの出来ない情報も多く記されている。『満日』は、1907年から1945年まで発行され、その約40年間の発行時期は日本の満洲経営と一致している。この意味で『満日』は、日本の満洲経営、またこの時期の中国東北地域社会の実態を解明する上で、高い史料価値を持つものであると言える。

また、『満日』は現存する大連で刊行された定期刊行物の中ではほぼ完全な状態で保存されている。これらの点から総合的に判断すると、『満日』の記事によって中国東北地域における日本人と中国人社会の世相や動向の把握などで、これまで見落とされてきた史実を掘り起こすことができると思われる。

本稿は、これまでほとんど注目されてこなかった大連彩票（富籤）問題を取り上げ、『満日』の紙面がこの問題をどのように報道しているかを検証し、大連彩票の発行開始（1905年）から廃止（1915年）にかけての推移を辿りながら、(1) 大連彩票について、『満日』がいかなる報道を展開したのか (2) 大連彩票の発展について、『満日』はいかなる役割を果たしたのか、について検討することを目的とする。

キーワード：大連彩票、『満洲日日新聞』、『遼東新報』、『大連新聞』、関東州

はじめに

## 1. 『満日』について

### 1.1 『満日』の創刊経緯

### 1.2 新聞社の経営

## 2. 『満日』に現われる大連彩票

### 2.1 大連彩票概況

### 2.2 新聞紙面に見られる大連彩票の実態

### 2.3 大連彩票廃止への途

## 3. 大連彩票に関わる『満日』の立場

結びにかえて—租借地大連における『満日』の  
二重性格—

## はじめに

日清戦争（1894年–1895年）後、旅順、大連を含む遼東半島は日本に割譲されたが、独仏露の三国干渉による一旦中国に返還された。その後、1898年にロシアが大連、旅順を租借し、自由港として、極東の港ダルニー市の都市・港湾建設を開始した。日露戦争中に日本軍は大連を占領し、1905年1月27日に日本軍は遼東守備軍令第3号で、2月11日以後「大連」と改称すると発表した<sup>1)</sup>。

日露戦争後、ポーツマス条約によって日本は旅順・大連を含む「関東州」の租借権、満鉄附属地などの諸権益をロシアから獲得した。1906年には、ロシアから獲得した中東鉄道南部支線を経営するために、南満洲鉄道株式会社（以下「満鉄」と略す）が東京で設立され、1907年4月大連に本社を設置した。以来、大連は日本の満洲経営の中心として、在住日本人も徐々に増えた。大連は日本の満洲経営の政治的、経済的中心となり、在満日本人の生活拠点ともなった。それに伴って、日本語新聞の需要も一段と大きいのとなった<sup>2)</sup>。

大連において最初に創刊された日本語新聞は、1905年10月25日創刊の末永純一郎の『遼東新報』である。1907年11月3日『満日』創刊後、大連の新聞界は『満日』と『遼東新報』によって二分されていた。1920年5月には、『大連新聞』が創刊され、三紙鼎立の状態となった。しかし、それは長続きせず、『満日』は1927年10月と1935年8月に『遼東新報』と『大連新聞』を相次いで合

併することにより、大連さらに中国東北地域新聞界において独占的な地位を築いていった。

『満日』には、大連を中心とする中国東北各地の日本人及び中国人社会の動向に関する記事が多岐にわたって掲載されていただけでなく、日本国内のメディアでは得ることの出来ない情報も多く記されている。しかも、『満日』は、1907年から1945年まで発行され、同紙約40年間の発行期間は日本の満洲経営の期間とほぼ一致している。

現在では、租借地大連で刊行された定期刊行物の中ではほぼ完全な状態で保存されているのは、『満日』と『大連新聞』だけである。そして、『遼東新報』は大連市図書館に保存されているが、史料修復の理由で閲覧不可とされている。ほかに、当時大連で発行された中国語新聞『泰東日報』（1908年創刊）が、東京大学大学院情報学環・学際情報学府センターに所蔵されているが、欠号が多いため、全体の状況は把握しにくい。この意味で『満日』は、日本の満洲経営、あるいはこの時期の中国東北地域社会の実態を解明する上で、高い史料価値を持つものである。

『満日』の再検討は中国東北地域における日本人と中国人社会の世相や動向の把握など、これまで見落とされてきた史実を掘り起こすことができると思われる。

満洲日日新聞社（以下は満日社と略す）は日本の大陸政策を推進するために、紙面編集に限らず、『満洲十年史』、『南満洲写真大観』、『沿線写真帖』、『満蒙全書』などを出版し、「頭彩（1

等賞)は何番か」などの予想投票のほか、「お正月の歌留多会」、「学術講演会」、「日中記者大会」、「飛行機展覧会」、「聯合艦隊便乗見学」、「満洲児童の母国見学」など、各種のイベント事業にも積極的に取り組んだことが明らかになっている。これらのイベントにより満洲内部、満洲と日本内地との間に人的及び情報交換のパイプも徐々に築かれた。租借地という特別な環境であるからこそ、これらの事業の持つ影響力が更に大きくなったと考えられる。

この点に関してはこれまでの研究はほとんど注目していない。『満日』を取り巻く諸課題は少し研究蓄積がある。しかし、先行研究の多くは、それを一次資料として、特定時期の新聞記事内容を分析することに留まっている<sup>3)</sup>。つまり、新聞社の内部的な事情、例えば人事構成、新聞紙面の構成と編集、新聞社の活動、新聞人と新聞社の関係、また、満日社が日本大陸政策を推進するために、植民統治の一つ手段として如何に植民政策を支えていたのか、に関する検討は、まだ十分とは言えない。

その中で、先駆的な研究としては李相哲の『満洲における日本人経営新聞の歴史』(凱風社、2000年)が挙げられる。李氏の研究は『満日』を中心とする日本人経営日本語新聞の変遷を体系的に整理したうえ、『満日』の論調についても満洲事変前後の時期を中心に具体的な検討を行っている。これは現在までの『満日』に関わる研究の中で最も信頼性が高い成果であるといえる。しかし、その研究では、考察対象としての『満日』について新聞経営における満鉄側の深い関与の存在が指摘されているものの、日本の大陸政策を推進するために、いかなる経営戦略をとったのかについての分析は行われていない。換言すれば、満洲新聞史に関しては、まだ本格的な研究はなされていないと言えるであろう。

そのアプローチとして、本稿は大連彩票を一例として取り上げ、『満日』の紙面記事と照合し、

大連彩票の発行開始(1905年)から禁止(1915年)にまでの推移を辿りながら、(1)大連彩票について、『満日』がいかなる事業を展開したのか(2)大連彩票の発展において、『満日』はいかなる役割を果たしたのか、について検討することを目的とする。

まず、大連彩票を取り上げる理由について簡単に触れておきたい。

日露戦争直後、当時の関東州民政署<sup>4)</sup>は「富籤の発行を以て租借地振興の一策とし、支那多年因襲の嗜癖たる好賭心を節度し且つ経費填補の一財源に資する」<sup>5)</sup>ことを目的として、1905年10月、大連在住中国人中の有力者劉肇億<sup>6)</sup>及び郭学純<sup>7)</sup>に条件付で大連彩票の発行を許可した。劉、郭等は同年11月に大連に「宏済彩票局」を創設し<sup>8)</sup>、同年12月、第1回大連宏済彩票(以下「大連彩票」と略す)を発売した<sup>9)</sup>。

当初は、民政署との契約により、発行部数は1万枚、代価1万円であった。彩票局は、発売代価から代売手数料を控除した残余の3分の1を民政署に納付し、3分の2を彩票局経費及び諸般の公共事業に支出することが定められていた<sup>10)</sup>。このような条件下で、1908年4月には、宏済善堂の事業を開始した。

第1回大連彩票開彩から1915年4月の彩票発行廃止に至るまで、総発行回数は167回、892万本、代価892万円である。その内、彩金、公納金、其他の必要な経費を差し引いた利益金は宏済善堂の経費及び地方事業のために支出された<sup>11)</sup>。こうしたことから判断して、日本統治初期の大連で、大連彩票が大連地域開発に多少なりとも役割を担ったことは否定できない。

しかし、従来の租借地大連あるいは近代中国東北地域に関する研究において、大連彩票を取り上げたものが殆どないため、大連彩票があったという基本的事実すら知られていないように思われる。

実際には、1907年11月から1915年4月(大連彩票廃止)までの『満日』に目を通してみると、

大連彩票を中心とする情報について、詳細かつ多岐にわたって記載されていることが分かる。

この意味で、『満日』の再検討は大連彩票問題の実態を解明する上で大きく役立つのみならず、租借地都市大連社会における『満日』の機能、さらに日本の植民地統治の一側面を理解する機会も提供できると考えられる。

## 1. 『満日』について

### 1.1 『満日』の創刊経緯

後藤新平は近代的帝国主義の先駆者として、台湾総督府民政長官時代から、新聞の「操縦」をかなり重視していた<sup>12)</sup>。彼の「新聞利用」は、満鉄総裁時代にも行われた。

1907年4月、満鉄本社が大連に設置された。満鉄が大連で業務を開始する前の3月、初代満鉄総裁となった後藤は満洲を視察した。後藤に同行した満鉄庶務課長となった沼田政二郎によれば「満洲に行って、後藤子爵が一番先に目をつけたのが、新聞と印刷事業であった。[中略]文化を促進せしむるには、どうしても新聞の力に寄らなければならない」、「いろいろ研究した末にいよいよ理想的の新聞を創立することになった」<sup>13)</sup>と新聞を作ろうとした動機に触れている。

当時、大連にはすでに唯一の日本語新聞『遼東新報』があった。満鉄は、最初『遼東新報』を買収して機関紙にしようとしたが拒否された<sup>14)</sup>。それで、後藤は「『遼東新報』は単に日文のみなるを以て清国人は勿論、欧米人等に通用せず為に我が満洲方針に関し誤解を惹起するの恐ある」<sup>15)</sup>と考え、「印刷機関を完備して日清英の3文を以て別に日刊新聞を発刊する議を建て」<sup>16)</sup>、新たに新聞を作ることにした。

後藤は「新聞創刊の仕事を森山「守次」に与えた」<sup>17)</sup>とされる。森山守次(1875年-1929年)は、1899年7月東京帝国大学法学科を卒業したあと、同年10月米国へ旅立った<sup>18)</sup>。米国滞在中、博文館から出版されていた雑誌『太陽』の通信記者を勤めていた。森山は、その後、1902年2-3月台

湾へ渡り、台湾全島沿岸視察を行った<sup>19)</sup>。さらに、同年6月-12月外務省から命令を受け、台湾、厦門、汕頭、香港、澳門、広東、シンガポール、中央アジア、印度、ロシアの各地を視察した<sup>20)</sup>。森山は1903年8月、東京で雑誌『内外世論』を発刊し、同時に横浜において『横浜新報』を経営、同年9月から、新声社を経営し始めた。1904年、台湾に渡って総督府統計講習会嘱託吏員となったが、間もなく辞職し、東京に帰って新聞又は雑誌の記者となった。

このようにして、森山は欧米遊学、海外での調査活動、博文館記者時代、『横浜新報』・新声社時代などを経て、政治・経済・文学などに幅広い人脈を構築していた。『満日』創刊初期の人事構成を見て分かるように、東京帝国大学同級生の原口聞一<sup>21)</sup>、博文館通信記者・『横浜新報』時代の倉辻明義<sup>22)</sup>、山中古洞、『横浜新報』時代の西村正雄、西村巳之助、石橋文三郎、安岡重雄(夢郷)、伊藤武一郎、新声社時代の木下栄らがあげられる<sup>23)</sup>。これらの人々の支えがあったからこそ、『満日』は順調に創刊できたとも言えるだろう。こうしたことが、「新聞創刊の仕事を森山「守次」に与えた」一つの理由ではないかと思われる。

1907年7月、後藤は東京印刷株式会社(以下東京印刷と略す)社長の星野錫(1854年12月26日-1938年11月10日)に新聞発刊の意を告げた。星野は、1896年に東京印刷株式会社を設立し、自ら社長に就任した。日露戦争に際して、東京印刷は官報号外、恤兵部の承認状などの用紙の提供、或いは日露戦史、『日露戦史写真帖』、『日露戦役記念絵葉書』の印刷などの命令を受けた<sup>24)</sup>。そのために、東京印刷は社員を戦地に派遣しており、租借地になる前の関東州とのつながりを築いていた。戦争後、星野は大連で絵葉書などの印刷で事業を拡大しようという意欲を持っていたので、後藤満鉄総裁の要請に応じた。

このように、大連に進出する計画をもっていった星野を社主とし、新聞業務に明るい森山を社



長とする満日社は1907年8月に東京で創立され<sup>25)</sup>、事務所を東京芝区松本町の森山の自宅においた。

東京において、満日社員となった人々は上田務、西村巳之助、池内重雄、石橋文三郎、水野應佐、明石奇峰、桑原喜八、安岡夢郷、宮田暢の九名であった。他に森次太郎、倉辻明義、吉武源五郎、島田重就、結城素明らが支援した<sup>26)</sup>。1907年10月15日、森山が満日社初代社長として大連へ向かって出発した<sup>27)</sup>。

「今考へると随分大胆なるものであつた。實際、森山氏を始め、一人として満洲の土地を踏んだ者がない、否、土地を踏まぬ<sup>ばか</sup>許りか、満洲に関する何等の知識を持つて居なかつたのだ。唯だ満鉄といふ大きな後援のあるのをたよりにして、大連へ渡れば何うにかなるといふ至極呑気な心持で居た者が<sup>すくな</sup>はなかつた」<sup>28)</sup>と社員であった安岡夢郷は回顧している。

『満日』創刊号は64頁にのぼる膨大なものであり、前半30頁分と8頁分の広告が東京印刷の深川分工場で印刷した。出来上がった新聞と深川工場で積み出された後半の活字を荷造りして、原鉄運送店から神戸の後藤回送店へ送り、10月22日出帆の開城丸で大連へ発送した<sup>29)</sup>。後半は、大連元海軍防備隊跡<sup>30)</sup>の社内で印刷した。

発刊当時、編輯局には新聞編輯経験のある社員は少なかった。「当時森山守次氏の参謀となつて、記者の選択、発刊すべき新聞の体裁、一頁の段数、一行の字数、題字其他の枢要事項を決定したのは些か自画自賛の嫌いはあるけれども事実<sup>ママ</sup>に於て私一人の受持であつた。さうして『満洲日日新聞』といふ題名を選んだのも、森山氏と私と二人で協議したものである。」<sup>31)</sup>と安岡は回想している。そして、東京印刷から派遣された職工も殆ど無経験者であったため、ようやく11月2日の夜中に第1号の印刷が出来上がった。「辛うじて間に合わせた第一号」と安岡は回顧している<sup>32)</sup>。

こうして、1907年11月3日<sup>33)</sup>『満洲日日新聞』創刊号が発売された。創刊号から年末までの題

字は「日支親善」を表す意味で鉄良という中国人官吏が毛筆で書いた『満洲日日新聞』が使われた<sup>34)</sup>。1908年1月1日以後の題字は肅親王が特に『満日』のために書いたものであった<sup>35)</sup>。

創刊号には、森山守次社長、後藤新平満鉄総裁をはじめ、政治、経済など幅広い分野で活躍する人物の祝辞が載せられた。『満日』の発刊に対して、満洲経営者たちは大きな期待を寄せるのではないかと考えられる。

また、創刊号には、広津柳浪、徳田秋声、三島霜川、斉藤弔花、昇曙夢、高浜虚子、徳富蘇峰、佐々木信綱、与謝野鉄幹、与謝野晶子、児玉花子、内藤鳴雪、夏目漱石、邑井一、三遊亭圓遊、中村不折など、明治期に日本の文壇で活躍していた著名な文学者などの作品も載せられていた。紙面は、小説、詩歌、俳句、講談、落語、挿絵などで構成され、紙面の豊富さは当時日本国内で発行されていた大新聞にくらべて遜色のないものであったと言えよう。

## 1.2 新聞社の経営

『満日』は、資本の一切を星野が支出し、編集営業を満日社が行ない、東京印刷へは毎月新聞紙の紙代と印刷代を支払うこととした<sup>36)</sup>。創刊初期の編集人は満日社の明石定一で、発行兼印刷人は東京印刷大連出張所主事の斉藤章達であった。満日社と東京印刷が各自に分担する役割は明確であったことは明らかである。

『満日』は創刊間もなく、旅順、営口、及び奉天に支局を置いていた。その後、柳樹屯、瓦房店、大石橋、営口、海城、遼陽、千金寨、鉄嶺、昌図、開原、公主嶺、長春、吉林、哈爾浜、新民府、本溪湖、安東、天津などの主要都市に取次販売所を設置し、朝鮮でも満洲と隣接する新義州をはじめ主要都市に販売所を設置した。また、東京、大阪にも取次販売所を開設していた<sup>37)</sup>。

『満日』は年中無休の日刊紙として発刊された。紙面は大半が6頁であったが、新聞・俳句・小説連載・家庭欄・衛生欄・投書欄・文芸欄・広告欄・

英語欄などが設けられている。発行部数は1908年には1日6500部で、1911年には9700部、1916年には15,400部と、順調に増加した（表1参照）。また、発刊部数の増加に伴い、「営口週報」、「長春週報」、「鉄嶺週報」、「奉天週報」、「大石橋週報」、「瓦房店週報」など満鉄沿線各地の週報が紙面第4頁に掲載された。

1908年に満日社長であった森山は、政界の黒幕などと言われた杉山茂丸（1864-1935）の支援を受け、松井伯軒（廣吉）などとともに東京に太平洋通信社を創立した。森山は太平洋通信社長として、同年11月22日には、日本最初の週刊誌『サンデー』<sup>38)</sup>を創刊した。『サンデー』と『満日』は密接な関係を持っている。元『満日』社員であった宮田暢は『サンデー』創刊後に太平

洋通信社の副社長に就任し、後に安岡夢郷も入社した<sup>39)</sup>。また、当初『サンデー』発行所の太平洋通信社が「『満日』の内地への宣伝橋頭堡であった」ことは、『満日』に就職した阿部真之助が述べている<sup>40)</sup>。さらに、1910年7月3日『サンデー』の第83号から、太平洋通信社内に週報社が設けられ、『サンデー』の発行所となった。週報社が独立移転するまで、三社は電話を共用して業務にあたっていたのである<sup>41)</sup>。

1909年9月、森山は「太平洋通信社の業務近來漸次整備伸張致来候に伴ひ親しく新聞の業務に当り難き次第と相成候に付今回社主の更代を機とし退社致し専ら通信社の事業に力を尽くし候」<sup>42)</sup>という理由で、『満日』社長を辞任し、東京に帰った。次いで実業家伊藤幸次郎（1865年7月12日

表 1 『満日』配布部数

年度	名称	毎回配布部数（部/1日）						
1908年末迄	満洲日日新聞	6,500						
	遼東新報	4,500						
1909年末迄	満洲日日新聞	6,200						
	遼東新報	4,050						
1910年末迄		大連	大連以外の清国各地	日本内地	朝鮮	台湾	其他	計
	満洲日日新聞	3,700	4,000	500	500	500	500	9,700
	遼東新報	2,000	3,500	400	500	200	300	6,900
1911年末迄	満洲日日新聞	3,600	4,000	500	500	600	500	9,700
	遼東新報	3,600	3,600	400	500	200	300	8,600
1912年末迄	満洲日日新聞	4,250	5,400	850	700	300	750	12,250
	遼東新報	5,500	4,200	800	550	150	600	11,800
1913年末迄	満洲日日新聞	4,350	5,400	1,050	700	250	800	12,550
	遼東新報	5,600	5,300	800	600	100	700	13,100
1914年末迄	満洲日日新聞	5,800	5,900	950	850	250	700	14,450
	遼東新報	5,900	5,300	800	600	100	800	13,500
1915年末	満洲日日新聞	5,950	6,000	1,060	920	250	650	14,830
	遼東新報	5,740	5,990	870	950	120	700	14,370
1916年末	満洲日日新聞	6,450	6,350	1,100	900	150	450	15,400
	遼東新報	5,936	6,578	1,030	720	152	629	15,045

表注：1908年末-1916年末のデータは、関東都督府編『関東都督府統計書』（明治41年-大正5年版）関東都督府都督官房文書課、により筆者作成。

-1928年10月31日、京都出身。号荊堂)<sup>43)</sup>が2代目社長として就任した。それにともなう、星野は東京印刷大連出張所の業務を伊藤に譲渡した。1910年5月、満日社は東京印刷大連出張所の財産及び業務の全部を譲り受けて、満日社印刷部と改称した。

1911年8月、守屋善兵衛が社長として就任してからは、村田誠治を副社長として実務に当り、守屋は多くは東京に居住していた<sup>44)</sup>。1913年5月には村田が社長に就任し、経営に努力したため、新聞社の基礎が漸く定まってきた。そして1913年11月にそれまで社長個人名義となっていた満日社は株式会社となった。この時点にいたって、満鉄は『満日』の株の約82%を引き受け、全額を払い込んだ<sup>45)</sup>。このように、社業が益々刷新するに従い、『満日』は「全満洲を通じての第一流たるのみでなく内地の新聞にも五指を数ふるの一つ」<sup>46)</sup>となされている。

『満日』創刊後の大連新聞界は『満日』と『遼東新報』によって二分されていた。『遼東新報』は民間紙の立場を貫き、『満日』にとっては有力な競争相手であった。表1に示したように、明治末から大正初期にかけては、『遼東新報』の発行部数は常に『満日』を凌駕していた。その後、第1次世界大戦に際して、大来修治が『遼東新報』社長に就任した。戦争の影響で、日本の大陸進出と内地商品の販路拡大により、新聞広告は増加し、購読者も増えてきた。この好景気を利用して、大来は遼東新報社業の基礎を固めると共に、新聞社の事業を拡大していたのである。

1920年に入ると、『大連新聞』（1920年5月）の創刊に伴い、大連は『遼東新報』・『満日』・『大連新聞』の三紙鼎立の状態となった。とはいえ、『遼東新報』は、大連と満洲において『満日』を追い抜いて民間の代表的な新聞として地位を確実なものとした。

ところが、1927年10月末、『遼東新報』は『満日』に合併されることになった。合併について、大来は次のように回顧している。「昭和2年春、

満鉄の首脳部が代って、山本<sup>ママ</sup>桑太郎総裁、松岡洋介副総裁となった。両者とも旧知の間であり、反満鉄の調子の新聞を続けることが心苦しくなった。同時に満日には山崎猛社長が就任、山本、松岡両君の意向を汲んで小泉策太郎が幹旋役となって、満日、遼東両新聞合同という形で、遼東新報を満日に譲渡することになった。それが実行されたのは昭和2年24日、奇しくも22年前、遼東新報が生まれたその日であった。」<sup>47)</sup>『遼東新報』合併後の『満日』は1927年11月1日から紙名を『満洲日報』に改題した。さらに、1935年8月7日には『満洲日報』と1920年5月5日創刊の『大連新聞』が合併し、再び創刊時と同じ名称の『満洲日日新聞』の紙名で発行されるようになった。以来、第二次世界大戦が終了する1945年9月まで発行された。

## 2. 『満日』に現われる大連彩票

### 2.1 大連彩票概況

日露戦争直後の1905年8月、当時の関東州民政署は、大連在住中国人中の有力者劉肇億及び郭学純に、行政諸般の補助機関として大連公議所を組織させた。大連公議所は、在住中国人の貧困者に対し、慈善救済事業を行うことが期待されていた。ところが、日露戦後という状況下で、経費不足だけでなく、各地方に孤児寡婦及び傷病者が多数存在していたことなどにより、事業はうまく進んでいなかった。そのため劉、郭等は、救済機関設備のため、利益を慈善事業の経費に充当することを目的として、彩票局を創立し、彩票発行を関東州民政署に出願した<sup>48)</sup>。

日本の租借地となった大連はそもそも中国の領土であり、住民の大多数は中国人であった。中国各地では昔から彩票を用いていた。関東州民政署は「富籤の発行を以て租借地振興の一策とし、支那多年因襲の嗜癖たる好賭心を節度し且つ経費填補の一財源に資する」<sup>49)</sup>という理由で、陸軍、大蔵両省及び満洲軍総兵站監及び関東総督府と協議の上、1905年10月22日に劉、郭

にいくつかの条件付で彩票の発行を特許した<sup>50)</sup>。  
劉、郭等は同年11月に大連で「宏済彩票局」を  
創設し<sup>51)</sup>、同年12月、第1回大連宏済彩票（以下  
「大連彩票」と略す）を発売した<sup>52)</sup>。

関東州民政署が彩票の発行にあたって定めた  
条文は以下のようなものである<sup>53)</sup>。

- 一、彩票局ハ大連ニ設立シ宏済彩票局ト称ス
- 二、彩票ノ数ハ二万号（本）トシ每号十枚ニ  
分割ス
- 三、売価ハ銀一円
- 四、開彩ハ毎月二回
- 五、当籤票数及彩金（表2の1905年12月分を参  
照）
- 六、全部売切レサルトキハ其発売ノ号数ニ比  
例シ彩金額ヲ通減ス
- 七、代売人ニハ手数料トシテ売価ノ百分ノ三  
ヲ与フ
- 八、彩票局所得即発売代価ノ十分ノ二ニ相当  
スル額ヨリ前項代売人手数料ヲ控除シタル  
残余ノ三分ノ一ヲ民政署ニ納付シ其残  
余中彩票局経費ヲ控除シタル利益金ヲ以

- テ大連ノ振興並ニ公共事業ニ充ツ
- 九、得彩者ハ得彩金ノ百分ノ三ヲ当該代売人  
ニ報酬スル義務ヲ負フ
- 十、授受ノ貨幣ハ軍票トス

上記の条文にあるように、彩票発行当初の計  
画は、票数は2万本、売価は1本銀1円、彩金（当  
籤金）は頭彩（1等賞）5千円より8等賞2円まで  
とし、月2回発行するとされていた。月5000-  
9000余円の利益金が得られる<sup>54)</sup>。売行きが漸次  
良好になるに従って、1906年6月、10月に臨時特  
別彩票<sup>55)</sup> の発行が許可されたが、いずれも売行  
き不良であった。彩票局は前後8千余円の損失を  
蒙ったため、臨時発行は廃止され、通常発行の  
みに限定された<sup>56)</sup>。

また、発行票数と発行回数は徐々に増加し、  
表2に示したように、1907年7月12日からは、1回  
の票数を2万本から4万本に増やし、月1回から月  
20日毎に短縮開彩した。尚、地方通貨の変遷に  
伴って彩金が総て金建てに改定された。

1908年7月第35回開彩から票数は従来の4万本

表 2 当籤票数及彩金変化表

	1905年12月		1907年7月		1908年7月	
	当籤票数（2万本の内）	彩金（銀）	当籤票数（4万本の内）	彩金（金）	当籤票数（6万本の内）	彩金（金）
頭彩	1本	5,000円	1本	10,000円	1本	10,000円
2彩	1本	2,000円	1本	5,000円	2本	5,000円
3彩	1本	1,000円	1本	1,000円	3本	1,000円
4彩	20本	100円	4本	300円	8本	300円
5彩	50本	40円	10本	100円	24本	100円
6彩	100本	10円	50本	30円	80本	30円
7彩	330本	5円	100本	10円	120本	10円
8彩	500本	2円	500本	5円	700本	5円
備考	1905年12月第1回：清暦月2回発行、売価1銀 1907年5月から：月1回清暦20日発行、同年7月から：売価1金に変更 1913年以降：清暦月2回15日毎に発行、売価1金					

出処：後藤新平「大連彩票私見」（水沢市立後藤新平記念館編『後藤新平文書』水沢市立後藤新平記念館、1908。  
マイクロ版は雄松堂作成発売、R-27（7-54））、『満日』に基づき筆者作成



から6万本となり、2彩（2等賞）以下の当籤数も増やすことに改定された。さらに、1913年から1915年最終の開彩日までは、毎月2回15日毎に発行された。

また、関東州民政署が定めた条文中の第八条は、大連彩票の収益の配分については、発売代価から代売人手数料、公納金、他の経費などを控除した残余を利益金として大連の地方事業のために支出するとしている。

『関東都督府統計書・明治41年版』によれば、彩票局から都督府に入った納付金は明治38年度（1905年）4764円、39年度（1906年）13103円、40年度（1907年）31241円、41年度（1908年）73768円と明治41年度とされている。42年度以降は記されていない。その収入を隠したのではないと思われる。

また、彩票局はその収益金の3万円を基金として宏済善堂設立の計画を立て、1907年に2万7千円を投じて建物を建設し、1908年4月から、宏済善堂の事業を開始した。事業内容は、慈善事業であり、主として寡婦、孤児に対する援助、養老、貧困者救済、身寄りのない者の葬儀、棺桶の施し、

阿片吸引者に対する治療などを行った。他に公学堂内の日本語伝習所や、小崗子公議所経営の病院も附属病院として継承した<sup>57)</sup>。

表3に示したように、第1回から第29回までの収入総額は5万8千余円である。内1万余円は善堂の建築費として使用され、3万7千円余円は其基本金として積み立てられた。外に公学堂に490円、同公学堂内の日本語伝習所に331余円、他の慈善事業にも951余円を寄付した。その事業は1915年4月彩票局廃止まで順調に進んでいる。関東州に於ける唯一の中国人経営の中国人慈善救済機関として、当時の大連地域の慈善事業に大きな役割を果たした。

また、収益の増加に伴い、彩票局は公共慈善事業の外、出雲大社分祠に1万円にも寄付し、大連で発行された中国語新聞『泰東日報』にも毎回300円を補助した<sup>58)</sup>。日本統治初期において、大連彩票は大連地域開発に多少なりとも役割を担ったことは否定できない。

## 2.2 新聞紙面に見られる大連彩票の実態

『満日』は大連彩票について、「当籤番号の掲

表3 第1回-第29回までの収支表

収入総額	金58823円10銭5厘	
内訳	50667円74銭	第29次迄ノ利益金
	2922円	貸付金利子
	5233円36銭5厘	第29次迄ノ彩金請求私権ニ属スル額
支出総額	金21618円10銭	
内訳	11124円53銭	善堂建築費及附属備品費
	490円	公学堂生徒寄宿舎寄附
	331円11銭	日本語伝習所費
	951円30銭	1906、1907年中書慈善事業ニ投資額
	2499円26銭	第1次特別彩票損失金補充
	5771円90銭	第2次同上
	450円	彩票局員賞与金
差引	金37205円5厘	積立金

出処：後藤新平「大連彩票私見」、水沢私立後藤新平記念館編『後藤新平文書』水沢市立後藤新平記念館、1908年。マイクロ版は雄松堂作成発売、R-27（7-54）より作成



表4 「毎回当籤者所在地分布表」(第26次-第60次)

開彩日	開彩回数	当籤者所在地
1907年12月24日	大連宏済彩票第26回開彩	頭彩 旅順、二彩 大連、三彩 奉天
1908年4月20日	大連宏済彩票第30回開彩	頭彩 大連
1908年5月10日	大連宏済彩票第31回開彩	頭彩 瓦房店、二彩 大連
1908年6月18日	大連宏済彩票第33回開彩	頭彩 大連、三彩 大連
1908年7月27日	大連宏済彩票第35回開彩	頭彩 大連、二彩 大連 普蘭店
1908年8月16日	大連宏済彩票第36回開彩	頭彩 小崗子、二彩 奉天 旅順、三彩 大連 大連 奉天
1908年11月3日	大連宏済彩票第40回開彩	頭彩 遼陽、二彩 大連 大連、三彩 大連 大連 大連
1909年2月10日	大連宏済彩票第45回開彩	頭彩 遼陽、二彩 大連、三彩 大連
1909年3月1日	大連宏済彩票第46回開彩	頭彩 千金寨、二彩 旅順 奉天、三彩 仁川 釜山
1909年3月21日	大連宏済彩票第47回開彩	頭彩 海城、二彩 大連 大連、三彩 大連 鉄嶺 長春
1909年4月11日	大連宏済彩票第48次開彩	頭彩 大連、二彩 大連 長春、三彩 ハルビン 大連 大連
1909年4月30日	大連宏済彩票第49回開彩	頭彩 大連、二彩 大連 鉄嶺、三彩 奉天 營口 大連
1909年5月19日	大連宏済彩票第50回開彩	頭彩 大連、二彩 大連 大連、三彩 奉天 大連 旅順
1909年6月8日	大連宏済彩票第51回開彩	頭彩 大連、二彩 旅順 柳樹屯、三彩 旅順 大連 營口
1909年6月27日	大連宏済彩票第52回開彩	頭彩 奉天、二彩 奉天 旅順
1909年7月16日	大連宏済彩票第53回開彩	頭彩 營口、二彩 大連 大連、三彩 旅順 瓦房店 大連
1909年8月5日	大連宏済彩票第54回開彩	頭彩 仁川、二彩 大連 柳樹屯
1909年8月26日	大連宏済彩票第55回開彩	頭彩 大連、二彩 大連 金州、三彩 大連 長春 奉天
1909年9月13日	大連宏済彩票第56回開彩	頭彩 小崗子、二彩 大連 大連、三彩 大連 大連 大連
1909年10月3日	大連宏済彩票第57回開彩	頭彩 大連、二彩 仁川 小崗子、三彩 大連 大連 大連
1909年10月23日	大連宏済彩票第58回開彩	頭彩 千金寨、二彩 旅順 大連、三彩 大連 金州 大連
1909年11月12日	大連宏済彩票第59回開彩	頭彩 大連、二彩 旅順 大連、三彩 仁川 旅順 新民府
1909年12月3日	大連宏済彩票第60回開彩	頭彩 金州、二彩 大連 營口、三彩 大連 大連 大連

表注：『満日』により筆者作成。

(前略) 其会場なる近江町支那劇場かけつけたのに十六日の午前九時過ぎ、■ふ彩票党は押し寄せてきた。土間■水を撒いたやうに静まり返って、読みあげる番号に耳を澄まして居る(中略) 抽籤台の側まで行つて見ると、五つ程丸い穴の開けた青塗りの四角の箱から、腕に紺金巾の腕ぬきをした日本人が細かく巻いた籤をつまみ出す、その左には赤塗りの小さい箱がある、それにも穴が一つあつて、支那の子供が同じ、赤い腕ぬきでつまみ出し八彩とか七彩とか読み上げる。(中略) 其後には彩票局の書記が十人筆を取つて其番号を書き

つける、其両側には警官が三人、憲兵が一人、民政署の属官が一人椅子にかかつて、厳めしく控へて居た、その隙にも開く籤の数は進むで、読み上げるものの声が一段高くなつた。<sup>ママ</sup>と三彩の番号と二度読み上げる、此の時片唾を飲むでいたらしい見物は、色めき立つて、懷から帳面を出して見るのもある、買ひ込むである彩票を引張り出すのもあつて、口々になにか呟いていたのは、何れも失望の世迷言であつたらう(中略) 正午に間もなく頃頭彩と■■■■高く読み上げた、待ち受けた見物は一斉に耳を立てて其読むを聞き、更らに張り



出されたのに引較<sup>ひきくら</sup>べて、愈々望みなしとあき  
られめた頃は、廣い劇場に失望の色が充ちて、  
(中略) 午後零時三十分この彩票開きは無事に  
終つたのである (中略) 終わりに劇場内の人  
いさいで暑つ苦しいなかに汗みつくと詰かけ  
て居た彩票党に御愁傷様を申上げておく。(や  
ぶ生)<sup>64)</sup> (下線筆者。欠損などにより原記載  
が判読できない場合、■印で示し、推定され  
る欠損字数分または適当な字数の空白を括っ  
て表示した。以下同じ。)

これは1908年8月16日第36回大連彩票開彩の光  
景である。下線を付した部分からは、大連彩票  
開彩会場は大連近江町大観茶園という支那劇場  
で都督府の吏員立会の下で執行され、参観席は  
目の色を変えた人達で満員であった現場情景が  
明らかになるだけでなく、そこでの生々しい人  
間模様が浮かび上がってくる。

『満日』はこれらの人々を「彩票党」と名付け、  
もちろん日本人も中国人も含まれている。前述  
の引用文にもあるように、中国人の購入者の姿  
も頻繁に新聞紙面に現れている。しかし、詳し  
く見れば分かるように、『満日』には「早朝より  
ひしひしと詰めかけたる彩票党を以て埋まり彩  
票熱は<sup>にら</sup>韭の臭気と言わんより寧ろ苦力の臭気と  
もいふべき悪臭に混じて蒸しかへる……」<sup>65)</sup>、「汚  
い面を重ね、口あんぐりと舞台を眺めてゐる下  
級支那人」、「中に目立って注意されたのは直ぐ  
舞台近くの臭い支那人……」<sup>66)</sup> など、「不潔・

臭い・貧乏・貪慾」な中国人イメージが描かれ  
ている。

### 2.2.3 「紙面企画」から見た大連彩票の注目度

1907年12月15日から『満日』には次のような  
社告が連日にわたって掲載されている。

来る(十二月)二十四日に開票する大連宏  
済局第二十六回彩票の頭彩即ち一万円の番号  
は何番でせうか此の番号を当てた者に賞金金  
二十円を進呈します若し正答者のなかった場  
合には最も近い前後の二人に十円づゝ進呈し  
ます但し何れの場合でも同番号のもの二人以  
上あるときは其金額を平分して進呈します、  
用紙は端書、一人一番号に限ることとして置  
きます、締切は彩票抽籤の前日正午、発表は  
彩票当籤番号発表と同時に、賞金は即座に郵送  
します<sup>67)</sup> (引用文中の括弧と下線は筆者によ  
る)。

これは大連彩票に関わる紙面企画であった。  
『満日』は開催時間や方式、賞金などの情報を連  
日にわたって伝え、また、開催初日からの投票  
累計総数及び最少と最大の番号をも紙面で公表  
した。そして、「今回の此の催しは非常なる読者  
の好評を博し、記者の机の上は毎日投票で山を  
なしております」<sup>68)</sup> などと、投票の状況を紹介  
している。また、この企画に協賛した市内の各  
商店からの賞品も、紙面で紹介された (図2)。



図2 「頭彩は何番か」に関わる広告の1例 (1907年12月19日付『満日』)



協賛した商店の住所や寄贈物品の内容も記されている。

最終的な「予想投票」の結果は、図3に示した通りであり、大連を主として各地から投票された票数は1万余通で、そのうち有効票の総数は、8,276通であった。第26次大連彩票頭彩の「予想番号投票」は、大変な人気を博したため、満日社は次のような社告を発表し、第27次彩票当籤番号の「予想番号投票」も行うこととした。

前回即ち第二十六次大連宏済局頭彩の予想  
番号投票はその数実に一万余、非常の成績を  
以て終了いたしました。満目荒涼たる満洲の  
冬季に於いて所謂慰藉の尠い読者に対し更に  
多大の趣味を与ふべく本社はその趣向に思ひ  
を凝らして居りますが爾来調査と研究に時日  
を経て漸く数種の新案を得たのであります、  
而して尚多少研究を重ねべき点がありますか  
ら之を他日に譲りまして旧臘来各地方から頭  
彩予想投票の再開始を促し来たりその葉書の  
みにても既に百余通に達して居りまして本社  
は諸君の希望を拒絶するの勇なく即ち諸君の

為に従ひ又々予想投票を行ふ事といたしました而し頭彩は前回に行ひましたから今回はその次の貳彩（2等賞）の番号即ち5,000円の当り籤に対し広くその、予想投票を募集します  
.....<sup>69)</sup>

#### 2.2.4 「読者投書」に現れた大連彩票

さて、大連在住の人々が、大連彩票に対して如何なる反応を示していたのか、以下簡単に考察してみよう。

『満日』は創刊当初から読者の声を反映する場として「東西南北」欄を設け、日本橋、岩代町、磐城町、逢阪町、松公園、大棧橋など、日本人が多く暮らす地域に投書箱を設置した。その趣旨は「広く諸君の気焰を蒐むる事としたり何の種類に拘らず、見たり聞いたり為た事を投書され度し」<sup>70)</sup> ということであった。

『満日』の「東西南北」欄を見ると、幅広い階層の読者がさまざまな投書を行っていたことが分かる。時に、大連彩票に関わる内容が掲載されることもあった。(表5参照)

表5に示したように、『満日』は「大連彩票」



図3 「予想投票」結果（1907年12月26日）

に関わる投書を数多く公開した。それらの投書の内容は主に (1) 彩票に関する問い合わせ (表5の第8、9番を参照)、(2) 彩票に関わるメッセージ (表5の第11、17番を参照)、(3) 当籤者からのメッセージ (表5の第4番を参照) の3種類に分

けられる。

また、投書の内容に加えて、「彩票狂人」、「一万円」、「彩票狂の一人」などの署名からみれば、大連彩票への注目度や期待度が、非常に高いというイメージが与えられるであろう。

表5 「東西南北」欄における「大連彩票」関係投書内容の例

番号	日付	内容
1	1907年11月27日	賭博をやると手が後ろへ廻る恐れがあるが彩票なら大つ平にやれるので我もっと買ひ込む、彩票を買って置くと当っても当らなくてもふたを開けるまでが楽しみで仕事をするにも励みが付くそうだ。(聞いた生)
2	1907年12月12日	大連彩票内地人より依頼を受け万一当籤し内地人直接買次者の名義を以て受取るとすれば有罪となるや且つ又大連彩票買次送付しても有罪となるや大連居住の人士に問ふ。(一商人)
3	1907年12月30日	諸君正月になったられびら切って騒ぎ玉へ彩票が当たったら埋合せをしてやるよ。(福助)
4	1908年1月2日	一金十円也右は今回貴社御催しの彩票予想投票に当籤の賞金として御贈與に預かり本日旅順支局の手を経て正に拝受致候に付御礼申上候敬具。 明治四十年十二月二十七日 (旅順延命芳太郎)
5	1908年1月3日	私は初夢に一万円の彩票が当たった夢を見ましたから早速一枚買ひました当たったら、東西南北の御連中にお振舞をいたします。(好運生)
6	1908年1月4日	貴紙五面の予告にある花あやめど題するもの、内容は如何なる性質のものぞこれを言ひ当てたものは彩票が当るよ。(福助)
7	1908年1月11日	彩票は無論銀の相場でせうが手数料は当彩に付何程ですか又代理店の手数料など御存じなら教へてよ。(梅香)
8	1908年1月11日	大連彩票の様に貴社の紙上に湖北彩票の当籤番号全部を御掲載くださる事は叶はずや御伺日申上候。(彩票狂人)
9	1908年1月24日	大連宏済彩票は日本人には取次販売法規しかできませんか差し支えなくば手続御承知の方はご教示を乞。(一万円)
10	1908年1月26日	貴社の御手数を煩わし彩票熱狂者の為め第一次より当月迄の頭彩二彩三彩の番号及び当籤地を紙上に掲載して諸人の参考に供せられたし。(統計学者)
11	1908年2月5日	一万円の彩票が当たったら早速女房を探しに内地へ帰る。(独身者)
12	1908年2月27日	諸君一万円の彩票が当たったら如何するかね、僕は差し詰め欧州漫遊の途に上る諸君の御考えを聞きたいものだ。(米公)
13	1908年2月29日	彩票僅かに三日で売り切れになったには驚く。(よか坊)
14	1908年3月7日	今度の彩票は必ずと又大連在住の人に当たるよ。(天眼通)
15	1908年3月26日	己は彩票を二十枚買ったがみんな五彩以上に当りさうだから一枚五円づつなら賣るよ、但し頭彩に当たったら己に半分呉れなくちやいけない。(買切人)
16	1908年4月10日	彩票が当たったら払って遣る。
17	1908年5月13日	彩票は一部一円なるに当地に於いての売捌代価は一円二十銭実に奇怪千万ならずや他に売捌店なきに乘じ利を貪る事斯の如きは恕する能わざるの悪行為と云ふべし。(彩票狂の一人)

しかし、自由に投書することは可能であっても、その採用は、新聞社が社説との関係でバランスをとりながら決定する場合が多かった。言い換えれば、読者の意見を望ましい方向へ導くためには、それらの投書は新聞社によって選択的に扱われたものあるいはやらせたものであり、新聞社の姿勢が表されたものであったと考えられる。

この意味で、『満日』は「大連彩票」に関わる投書を数多く公開し、彩票の発展に適した世論環境を作るための一翼を担ったことは確かである。

### 2.3 大連彩票廃止への途

このような世論環境の下で、大連彩票の売りは大きく伸びていった。それに従い、上述したように、彩票の利益による同市の慈善事業も順調に進んでいった。しかしながら、彩票の人気が高まるとともに、人々の賭博的射幸的欲望は、大連及び満鉄附属地に在住する中国人・日本人に留まらず、内地日本人にまで至った。

1909年4月、大連民政署は彩票の買占や、内地への携行に対して厳しい監督を加えた。当時の『満日』には、「……昨今は内地への輸出増加し大連在住の人々に傳手を求めて直接密に購入するもの、頓に増加したる……毎回当地在住者と連絡を通じて数百票の買占めを行ひて密輸し来たり1票1円のもの1円20銭乃至1円50銭位に売り付け暴利をむさぼりつつあるものあり……」<sup>71)</sup>といった内容が掲載されているほか、大連彩票を買うために渡来する者もあり、「旅館に宿泊して開彩の日を待ち多くを勝ち得ればそれを受け取って直ちに帰国する程の当彩金を得ざれば再び次の彩票を買い入れて……」<sup>72)</sup>などと、彩票の買占や内地への密輸、また販売価格の高騰や風紀上の問題もしばしば掲載されている。

また、関東都督府は大連彩票を「発行並ニ一般ノ購買ハ之ヲ従来ノ通り黙認シ唯海軍部内限リニ於テ特ニ訓示ヲ發シテ之ヲ取次又ハ購買ヲ

為サシメサル様取締リ」<sup>73)</sup>と、「海軍軍人（陸軍軍人モ同断）ニ付テハ海軍刑法第五条ニ於テモ刑法ソノ他ノ法令ハ外国ニ於テ犯シタル場合ニモ内国ニ於テ犯シタルト同様之ヲ罰スルトトナレルヲ以テ海軍軍人彩票ヲ購買スルト云ハ三万円以下ノ罰金又ハ科料ニ認ムコト法律上疑ナキ所ナリ」<sup>74)</sup>と軍人の彩票購買を厳重に禁止することを明記した。ところが、軍人の彩票購買事件が時々起ってきた。たとえば、1909年11月には、独立守備第6大隊第2中隊歩兵特務曹長飯友次郎は常当番卒の後備歩兵1等卒武田孫一の名義で、大連彩票（第59回）を購入し、頭彩当籤現金を受領したことが告発された。その結果、特務曹長飯友は停職処分を受けた<sup>75)</sup>。

こうしたことから、経済政策として発行された大連彩票が、様々な社会問題を生み出したことも事実である。

一方、彩票は賭博行為として大清律例では禁止された。しかし、清末においては、不平等条約の締結による賠償金、及び賠償金を返済するための外債は、清朝政府の中央に大きな負担を与えた。清政府は財政補填との名目で彩票の発行を認めた。各地では「救済」の名目を掲げ、相次いで彩票を発行した。清政府は彩票を抑えようとしたが強制力はなかった。この状況は1909年まで続いた。1909年11月から広東省、江蘇省、浙江省では彩票禁止運動が展開し始めてきた<sup>76)</sup>。この影響を受け、中国各地でも相次いで彩票禁止運動が展開された。1910年になって清政府民政部は彩票を禁止する命令を発した。中国各地で発行されていた各種の彩票が相次いで発行禁止となった。また、朝鮮でも彩票輸入が禁止された。これらの禁令が大連及び満鉄附属地にも影響を与え、大連彩票の票数は従来の6万本から4万本まで減少し、それに伴って、収益も多少の影響を受けた<sup>77)</sup>。

清政府の禁令によって、満鉄附属地で中国人に彩票の代売を禁じたが、禁じられなかった日本人を全て代売者にすることで、各地の日本人



経営の雑貨店、薬屋などが副業として販売するようになった。このため、各附屬地においては、大連彩票が依然として販売され続け、これに対して、各地官憲は相次いで当地における大連彩票の発売禁止を日本領事館に要求した<sup>78)</sup>。

1914年、関東都督府は「州内諸般の秩序漸く整え最早斯くの如き事業の存在を必要とせざるに至れる為」<sup>79)</sup> という理由で大連彩票の発行を翌年4月1日限りで廃止することを決定した。これに対して、満鉄沿線地方における彩票代売業者は彩票継続について縷々陳情したが<sup>80)</sup>、大連彩票は、開始以来10年を経て、1915年4月1日の開彩を最終として廃止された。

以上の内容から分かるように、彩票廃止の理由は、彩票自身の利害、清政府の禁令、関東州内諸般の秩序を整え（傍点筆者）など、いくつか挙げられる。しかし、その真相を、元『満日』記者の津上善七（蒼洋）は大連彩票廃止翌年の1916年3月11日『満日』発刊3000号記念号に掲載している「大連彩票復活論」で触れている。津上は彩票廃止の真相は「支那政府の抗議にありて存じ、我政府は支那の要求を容れて対支外交上の裨補に資せんと欲せし知見に出でしことは蔽ふべからざる事実なり」としている。それが事実であるかは確認できないが、主要な理由として可能性が高いではないかと考えられる。

1905年12月の第1回大連彩票開彩から、彩票の発行廃止に至るまで、発行回数は167回、892万本、代価892万円である。その内、彩金として支払ったものは713万4千4百8円、公納金は金61万3千4百余円である。その他の必要な経費を差し引いた利益金は宏済善堂の経費及び教育、衛生、廟社の保存など地方公共事業に支出されたが、その総額は49万余円に及んでいる<sup>81)</sup>。日本統治初期において、大連地域の開発に多少なりとも役割を担ったことは否定できない。

1914年12月関東都督府は、関東州のアヘン製造及び販売に対する個人特許制度を廃止した。アヘンの販売特許を宏済善堂のみに指定し、都

督府の直接管理の下で、善堂に戒煙部を設け、アヘンの輸入及び販売を行った。さらに、その収益から宏済善堂の運営を控除した残りが、関東州地方費として関東州の金庫に納められた<sup>82)</sup>。それが関東州の中央財政と地方財政の安定化に重要な役割を果たした。

こうした経緯を見れば、彩票収入に代わって、アヘン収益が関東州地域の一財源となったことは、大連彩票が廃止されたもう一つの理由ではないかと考えられる。

### 3. 大連彩票に関わる『満日』の立場

以上、『満日』の記事によって、大連彩票の販売、開彩光景及び彩票への注目度など、大連における大連彩票を概観した。

言うまでもなく、富籤である彩票は一種の賭博あるいは射幸心を煽る行為であり、日本では「天保の改革によって、富籤は一切禁止せられたが、民間ではやはり密に富興行にも等しいことが行なわれていた様である」。（注：藤木高三『富籤の話』今日の問題社、1940年。194頁。）明治元（1868）年12月太政官から「富興行之儀ハ兼而御禁制ニ有之处、近年諸国ニ於テ金錢融通ヲ名トシ、或ハ社寺再建等ニ興行致候向モ有之趣、元来僥倖之弊風僥倖之利ヲ以テ民心ヲ誘惑スルヨリ、自然農工商共其職業ヲ惰リ往々之カ為ニ家庭ヲ破リ候者不少哉ニ相聞エ以之外之事ニ候、斯御一新之折柄右様之所業殊ニ御趣意ニ相戻り候儀ニ付更ニ嚴禁被仰出候事」<sup>83)</sup> という布告が出された結果、富籤は厳禁された。さらに、1882年の刑法施行により、各地に残っていた種々の富籤は日本から消滅した。その富籤が再び登場したのは日本統治下の台湾であった。

1906年6月に、台湾総督府は「資金の島外流出を抑止する」と「公共事業設備に必要な費用を獲得する」などという名目を掲げ、同年10月18日に、第1回台湾彩票を発売した。彩票売出しの結果は予想以上の成績であったが、台湾彩票が引き起こした人々の賭博的射幸的欲望は、台湾



在住の台湾人・内地人または対岸の清国人に留まらず、内地日本人にも波及した。

当時の『朝日新聞』や『読売新聞』などから見れば、1906年末から1907年の始め頃にかけて、日本国内に台湾彩票の売買が始まったことが確認できる。例えば、1907年2月第2回台湾彩票の当籤者は、頭彩は大阪、二彩は東京、三等は神戸の在住者であった<sup>84)</sup>。続いて、第3回の頭彩が再び大阪在住者に当たった<sup>85)</sup>。

前述したように、日本の刑法により日本国内で富籤（彩票）発売、購買授受することは犯罪とされている。ところが、台湾彩票の頭彩が3回の中に2回まで大阪在住者に当たったことが事実である。この事実は直ちに検事局の注目を引いた。調査の結果について、「大阪府第四部にては台湾彩票を密に売買する者あるを旧冬より着目し其第一着として昨八日堂島米穀取引所附近に於て神戸市兵庫塚本通四丁目の相場師三木啓次（四十八）が密売し居るを認めて之を引致し彩票五十一枚を押収したり当府下に彩票に関係ある者一千人もある見込み……」<sup>86)</sup>と、『朝日新聞』が報道した。このようにして、台湾彩票売買者である三木啓次は遂に大阪区裁判所に起訴され、1907年2月19日に執行猶予付きの重禁錮1か月と罰金5円の判決を受けた<sup>87)</sup>。

この事件をきっかけとして、1907年2月20日から大阪で第2回彩票検挙が行なった。続いて、同年3月から東京地方裁判所にも大阪と同じような検挙が行われた<sup>88)</sup>。このようにして、台湾彩票大検挙は当時の一大事件ともなった<sup>89)</sup>。そのため、1907年3月20日に台湾総督府から、一時中止と発表され、台湾彩票はわずか5回で中止された。

大連彩票は官営の台湾彩票と異なって、「租借地振興の一策」<sup>90)</sup>として中国人によって発行されたものである。とはいえ、彩票のような富籤は、人々の射幸心を煽り、勤労によって財産を得る美風を損い、結果として社会風俗に悪影響を及ぼすおそれがあるものとして、一般には認識されているようである。それで、彩票で得た利益

も日本国内の世論に非難される傾向がある。例えば、1906年6月台湾彩票案を実施した際には、『朝日新聞』は「（前略）吾人は富籤興行に反対なり。内地に於て反対なる以上、他の領土内に於ても亦反対なるが、聞く所によれば、我関東民政庁にては本年1月より大連の清国人公議所役員連の合資に成る彼の宏済局の彩票（富籤）興行を許可したり。吾人はかたゞ政府の不用意を非とせざるを得ず。しかも既に関東民政庁に於ては之を許可したる末、台湾総督府は定めて興行に至る可き歟。就ては当籤有効期限の規定にても嚴重にするを注文す。是れ猶已には優る可きなり。兎も角も余計なる事を始むる人々かな。何の役に立つ事にや。」<sup>91)</sup>と、大連彩票や台湾彩票の発行に否定的な立場を強調した。また、台湾彩票の中止した際にも、『朝日新聞』は「（前略）或は土地の振<sup>マ</sup>合<sup>マ</sup>の為とか、或は自ら之を行はざれば他に利益を占めらるゝとかの理由の下に、台湾富籤を興行するは、罪深き業なり。」<sup>92)</sup>と、彩票に対する否定的な立場を改めて表明した。そして、台湾彩票の中止をきっかけに、大連彩票の存廃についての論議も提起された。

この点について、『満日』は1908年1月10日「大連彩票問題」という論説を掲載した。

（前略）台湾の彩票が愈々廃止の止むなきに至るあらば、吾が大連宏済局の彩票は東洋唯一のものとなるべく（中略）、第一、都督府たるもの今一層其監督を厳にして独占事業に対する報償の途を明らかにせしめんことを望まざるを得ず（中略）。次に（中略）、然れども、日本人の購買を妨ぐべからず若しくは妨け難きものなりとせば、之が売捌上の利益を支那人のみに占めしむるは、賢なる方針と謂ふべからず、寧ろ場所と員数とを制限して、日本人にも売捌くを許可するの優れるに如かざるにはあらざるか。

我等は道学者流が徒に射幸を排斥するの迂に左袒する能わず、彩票の発行、特に新開地

に於ける発行は、適当なる方針の下に之を経営するに於いては、寧ろ其開発に資するもの少なきに非ざるを知る、唯憂ふる所は経営の方針にあるのみ。(三東)

即ち、台湾彩票中止をきっかけとして、大連彩票は日本領土内唯一の射幸機関となった。そして、都督府が厳しい監督を加え、適当なる経営方針を取れば、彩票の発行、特に新開地における発行は、新領地の開発に資するものであることを主張した。これは、『満日』が大連彩票に対してとった基本的な論調でもあったと言える。

また、大連彩票第100次開彩に際して、『満日』は次のような論説を掲載している。

大連宏済局の発行に係る彩票は一昨日二月二十七日の開票にて回を重ねること百に至れり過般道路説を為す者あり彩票発行は百回を以て終了とすべしと然れども是好事者の捏造にして彩票は従来如く今後も発行せらるべく発行以来何等の弊害を認めざるを以て吾人も亦依然継続を希望する者なり。

彩票発行に反対する論者は(中略)一応有理の議論なる如きも場所と情状とを察せざる偏見と謂わざるべからず。(中略)彩票の利害得失に就いては世論紛々たり(中略)孰れも一理なきにあらざれども本州の如く射幸心に富める支那人十中八九を占むる地方に在りては假令彩票の売買を禁止するも到底其効あらざるべし寧ろ之を官許して一は彩票富籤買入の爲め他に流出すべき資金を防止し一は移民の招来方法として土地繁栄の資に供し一は彩票発行者の利益を割いて其の幾分を公共慈善の費用に投ずる事、事宜を得たるものと謂ふべし(中略)一派の論者中今日の如く特許主義公許主義に依らずして独逸其の他の如く之を官業とし官府之を發行すべしと説く者なきにあらざるも官府の彩票発行は従来我国の歴史にこれなき所にして……此の点よりするも

官行に適せず況や租借地にして種々の支障あるに於いてをや吾人は現状維持を以て最も適当なりと信ずるものなり。<sup>93)</sup>(下線筆者)

下線を付した部分から分かるように、『満日』が「資金流出を防止する」、「移民招来方法として土地繁栄に資する」、「公共慈善費用を獲得する」などの理由を強調して、大連彩票が「租借地の発展に資するものであることを承認する」との立場を改めて表明した。つまり、新聞紙面で「彩票の継続発行を希望する」という世論を喚起しようとする『満日』の姿勢が見られる。

続いて、1915年4月1日大連彩票の最終日に際して、『満日』は大きく紙面を割いて「空中楼阁消え失う一大連宏済彩票最終日の光景」という記事を掲載した。

賭事の好きな支那人は勿論在満邦人にも一種の魅力を以て猛烈にその射幸心をそゝってゐた大連宏済彩票は、開始以来年を経る事当に十年、回を重ねる事百六七次にして、愈々四月一日の開彩を最終として永久に廃止された。永い十年の間を在満幾多の人間に、毎回一擲万金の空中楼阁を幻想せしめてゐた誘惑の翼かゝるき此の魔物も、茲に全く其『底強い魅力』を封じられて終わったのだ。(中略)果敢ない空中楼阁を終に実現し得ない失望の結果発狂したり自殺したりした者さえあつたではないか。かくてこの恐るべき誘惑の魅力を有する彩票の存廃が在満邦人の健全なる発展に如何なる影響を及ぼすであらうか。満洲に志を得ず事業の成功に絶望し不愉快な生活に苦しい努力と闘ひながらも尚万一の僥倖を夢想し、一縷の希望を賭けて此の彩票に繋いで踏み止まり、魔物の魅力に引きづられてゐた、意志の弱い、非植民地的な一部の在留邦人等が、其の果敢ない希望さへ全く失消して終わった今後を果たしてどう動くであらうか?(下線筆者)

以上の内容から分かるように、『満日』は、大連彩票を在満邦人の精神的支柱とし、彩票存廃に伴い、在満邦人の精神的支柱も失っていくことは疑いないと強調した。また、前述したように、『満日』は大連彩票を移民招来の方法と見なしている。この意味で、『満日』は大連彩票の廃止は今後の満洲経営に多少とも影響を及ぼすことは否定できないことを強調していた。言い換えれば、『満日』は大連彩票の廃止に反対の立場に立っていたことが分かる。

また、津上善七は「大連彩票復活論」で、もし対中外交関係という理由で大連彩票を停止した場合には、「我が政府は（中略）何物を獲ざりしのみならず、狡猾なる支那政府は大連彩票の廃止を好機とし一面支那の窮迫せる財政を救うの目的を以て北京新華貯蓄銀行をして貯蓄票なる名称の下に頗る大袈裟の彩票を発行せしめたり。我が政府の愚を及ぶ可からざるものなり」<sup>94)</sup>と大連彩票を廃止することを批判した。津上は、大連彩票の廃止は「支那政府に一杯食わされしは否定すべからざるなり」ことを強調している。

続いて、彩票の利害について、津上は「大連の如き新開の植民地に彩票の発行は最も適合したる一種の良政策なり」と強調し、「民衆に一種の慰安を与える」、「刑事政策上必要なり」、「彩票は経費填補の財源なり」という面から彩票の利点を強調した。最後に、津上は「吾人は茲に大連彩票復活論一篇を早して関東都督府に献策し外務当局者の反省を促すと同時に在満邦人の注意を惹かんとす」<sup>95)</sup>と大連彩票の再開を呼びかけた。

以上、大連彩票に関わる『満日』の論説をいくつか取り上げたが、『満日』は、創刊当初から彩票廃止にかけての時期は、終始して「大連彩票は植民地経営の一種の良政策として発行すべきものであり、彩票の廃止を反対する」という立場に立っていた。

このような立場に立ったからこそ、『満日』は大連彩票に関わる記事を詳細かつ多岐にわたっ

て紙上に掲載し、大連彩票の発展に良好な世論環境を構築する一役を担ったことも確認できるだろう。

## 結びにかえて 一租借地大連における『満日』の二重性格一

本稿では、『満日』の紙面記事によって、大連で発行されていた大連彩票の発展経過を検討した。また、大連彩票の実態を明らかにすることで、大連彩票に関わる『満日』の立場を解明し、さらには大連における『満日』の性格を理解する機会も提供できた。

『満日』の紙面には、「当籤番号の掲載」、「紙面企画」、「読者投書」、「新聞記事」など、大連彩票に関する内容が詳細かつ多岐にわたって掲載され、多くの庶民大衆に対し、彩票購入を進めた。その目的の一つは、新聞の知名度を高め、新規読者の獲得を狙ったためである。また、「投書欄」の設置、「予想投票」の企画などの側面から見れば、『満日』の「大衆新聞」としての性格も現れている。

一方、新聞社は社会一大勢力として、間断なく読者になんらかの影響を与え、数万ないし数十万の人間を、一定の方向に導く影響力があったと思われる<sup>96)</sup>。特に、『満日』は、1907年11月から日本敗戦まで刊行され、当時の中国東北地域で広く読まれた。『満日』の影響力は大連を中心とする東北全域に及んだことが推測できるだろう。

当時、大連には大連彩票のほか、安東県彩票、湖北彩票、安徽彩票などが普及していたが、日本人のなかでの人気という点では、大連彩票に及ぶものはなかった<sup>97)</sup>。大連彩票の人気の背景には、人間の金銭慾に絡むものも垣間見られるが、その過程における『満日』の世論誘導も一要因であったと考えられる。

前述した通り、大連彩票は本質的には一種の賭博かつ射幸心をあおる行為であり、当時日本国内の刑法でも、関東州においても、日本人に



よる富籤発売、購買授受することは犯罪とされている。とはいえ、大連振興策の一つとして、関東州内における彩票の発行や購買を黙認した関東民政署の姿勢は批判されるべきものであったと言わざるを得ない。大連彩票は植民地統治を支える装置として機能したものであるともいえる。

一方、「満洲経営の急先鋒」<sup>98)</sup>と位置付けられた『満日』が、「満蒙大陸の文化的開発を中心の目的として東亜全局の精神的並に物質的発達を企図し、助長し、新聞紙としての天職と使命を全ふせんとする」<sup>99)</sup>という編集方針の下で、大連彩票に熱心に取り組んだ。報道内容を選択し、紙面企画を行うことで、大連彩票を一定の方向へ導こうとする『満日』の姿勢が見られている。この点から判断すると、『満日』の植民地統治の手段としての性格も明確にすることとなった。

## 注

- 1) 井上謙三郎『大連市史』大連市役所、1936年、30頁。(地久館復刻、1989年)
- 2) 高媛「租借地メディア『大連新聞』と満洲八景」『ジャーナル・オブ・グローバル・メディア・スタディーズ』4、駒沢大学グローバル・メディア・スタディーズ学部、2009年、22頁。
- 3) 佐藤勝矢の「満州事変勃発前後の『満洲日報』に関する一考察—国策会社・満鉄の機関紙の論調の変化とその背景」(『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』(10)、11-12、2010年2月)、竹村民郎の「1925年近代中国東北部(旧満洲)で開催された大連勸業博覧会の歴史的考察—視聴化された満蒙」(『日本研究』(38)、81-119、2008年9月)、塚瀬進の『満洲の日本人』(吉川弘文館、2004年)などが挙げられる。
- 4) 関東州行政制度の変遷は以下のようである。満洲各地軍政署統治時期(1904年5月-1906年2月)、遼東守備軍軍政統治時期(1904年9月-1905年5月)、関東州民政署統治時期(1905年5月-1905年11月)、関東総督府時代(1905年11月-1906年8月)、関東都督府時代(1906年9月-1919年4月)、関東庁時代(1919年4月-1934年12月)、関東州庁時代(1914年12月-1945年)。

- 5) 津上善七「大連彩票復活論」『満日』1916年3月11日。
- 6) 劉肇億(1851-1936)、大連の中国人商人。1904年に、日本当局により改組された大連公議会議会総理に就任。1907年には、医療・福利厚生経費の捻出を名目に宏済彩票局を創設して「彩票」を発行し、その利益で慈善施設である大連宏済善堂を開設。中国人の初等教育や大連初の漢語新聞である『泰東日報』の創刊にも尽力。1914年に大連公議会議を引退した。(貴志俊彦ほか『20世紀満洲歴史事典』吉川弘文館、2012年、224-225頁)
- 7) 郭学純(1876-1922)、大連華商公議会議会会長。大連の商人。1914年の大連公議会議改選で総理(会長)に選出される。大連の中国人を対象とする教育、文化事業、慈善事業などに積極的に参与した。郭は日本側の妨害を受けながらも、大連華商公議会議総理として関東庁に対して銀建維持の請願を行うと同時に、張作霖地方政権に対しても反対運動支援を求めるように請願した。金建一般化は、その結果1922年9月金銀併用に変更されることとなったが、郭は反対運動の過労により体調を崩し、1922年11月大連で病死した。(貴志俊彦ほか『20世紀満洲歴史事典』吉川弘文館、2012年、49頁)
- 8) 伊藤武一郎『満洲十年史』満洲日日新聞社、1916年、509頁。
- 9) 関東都督府官房文書課『関東都督府施政誌』関東都督府官房文書課、1919年、325頁。
- 10) 後藤新平「大連彩票私見」、水沢市立後藤新平記念館編『後藤新平文書』、1908年。R-27(7-54)。
- 11) 関東局『関東局施政三十年史』大連関東局、1936年、761頁。
- 12) 鶴見祐輔『後藤新平(第2巻)植民行政家時代』(勁草書房、1965年、83頁)には、次のように記されている。「伯の新聞利用は、ひとり台湾の新聞のみに止まらなかった。伯はひそかに人を内地に派して、常に内地の新聞を操縦せしめ、一方、中央政局の機密を内報せしむるとともに、他方、台湾統治に関する世論の喚起に努めた。その如何なる機略によれるものかは、今にいたって分明ではない」
- 13) 沼田政二郎「満洲日日新聞が創刊した時の追憶」『満日』1926年6月23日。
- 14) 李相哲『満洲における日本人経営新聞の歴史』凱風社、2000年、87頁。
- 15) 「大連日日新聞創刊」『東京朝日新聞』1907年10月15日。



- 16) 同上。
- 17) 前掲、「満洲日日新聞が創刊した時の追憶」。
- 18) 森山吐虹「香港紀行」『太陽』第8巻第7号、1902年6月5日。459頁参照。夏秋に関しては、森山は「兄弟とも思ふ夏秋」という。
- 19) 「人事会事」『台湾日日新報』1902年2月9日、森山吐虹「台湾航遊記」・「台湾周航記」『太陽』第8巻第8号、1902年6月15日。342-382頁参照。
- 20) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B11091695800「森山守次中央亜細亜印度露西亜各地視察報告」(B-3-5-7-31) (外務省外交史料館)、(第2画像目)。
- 21) 原口聞一 (1873-1935)、1873 (明治6) 年9月23日に長崎県出身。1899年、東京帝大法科大学3年の時に東亜同文会広東支部副会長となって広東に渡った。同地で日本語学校の創設と漢字新聞社の経営に当たった後、1902年福建省の三五公司に入り樟脳専売事業に従事した。1907年満洲日々新聞が創刊された際に大連へ渡り、翌年奉天支局開設と同時に支局長に就いた。1909年に退社して日中合併の清和公司を創設して董事に就いたが、1913年解散して京城日報特派員に転じた。同紙奉天支局を管理するかたわら居留民会長を務めたが、14年10月に両職を辞し、帰国して郷里で静養した。1916年8月再び渡満して奉天で世界新聞社満韓特派員を務め、かたわら榊原農場を整理してその経営に従事した。1935 (昭和10) 年6月12日63歳で死去。(竹中憲一『人名事典「満州」に渡った一万人』皓星社、2012年、1176頁)
- 22) 倉辻明義 (1877年5月21日-1945年5月)、号は白蛇。東京専門学校英語政治科卒業後、米国に留学。帰朝後『横浜新報』主筆、『万朝報』記者、『やまと新聞』編集長、『東京毎日新聞』主筆、同理事を歴任した。大正14年『二六新報』に転じ、昭和3年秋『報知新聞』論説部に転じた。(『昭和新聞名家録』参照)。李相哲『満州における日本人経営新聞の歴史』(凱風社、2000年、87頁)；貴志俊彦、松重充浩、松村史紀『二十世紀満洲歴史事典』(吉川弘文館、2012年、198頁)には、「今辻明義」と誤記されている。
- 23) 拙稿「『満洲日日新聞』の創刊と初代社長森山守次」(『Intelligence』第15号、2015年3月刊行予定) 参照。
- 24) 星野錫翁感謝会『星野錫翁伝』、星野錫翁感謝会、昭和10年、111頁参照。
- 25) 安岡夢郷「ひと昔」『満日』1917年11月3日。
- 26) 李相哲、前掲書、87頁。
- 27) 「人事」『東京朝日新聞』1907年10月14日。
- 28) 安岡夢郷「辛うじて間に合わせた第一号」『満日』1916年3月11日。
- 29) 同上。
- 30) 大連防備隊は1906年10月15日に解隊せられ同海軍構内は工作場のみとなり。東京印刷株式会社大連出張所、満日社本社として使われた。
- 31) 前掲、「辛うじて間に合わせた第一号」。
- 32) 同上。
- 33) 安成二郎は「森山吐虹氏のこと」(『政界往来』第22巻第2号、政界往来社、1956年?月、15頁) において、「満洲日日が創刊されたのは明治42年か3年で、そのとき森山氏は社長に、宮田暢氏は副社長になって大連に出かけた」と誤記している。
- 34) 李相哲、前掲88頁。
- 35) 『満日』1908年1月1日。「本日以後の本紙題字『満洲日々新聞』は肅親王殿下が特に本社の為に揮毫せられたるものに係る本社は同殿下が殊寵に對し謹」
- 36) 前掲、「ひと昔」。
- 37) 李相哲、前掲書、89頁。
- 38) 太平洋通信社住所は東京市京橋区元数寄屋町3にあった。大連大阪屋書店、営口、遼陽、鉄嶺、長春各支店が『サンデー』の販売所であった。
- 39) 前掲、安成二郎、15頁。
- 40) 阿部真之助『老記者の思い出話』比良書房、1950年、17頁。
- 41) 新橋5059番と3549番。週刊『サンデー』29号、1909年6月13日、9頁、同誌30号、1909年6月20日、20頁参照。
- 42) 「森山守次辞任 社告」1909年9月10日付『満日』。
- 43) 長尾半平『荊堂・伊藤幸次郎』財団法人四箇荘、1932年。3頁、61頁。
- 44) 末儀義太郎『満洲日報論』日支問題研究会、1932年、3頁。
- 45) 李相哲、前掲書、91頁。
- 46) 井上謙三郎、前掲書、764頁。
- 47) 大来修治「遼東新報の二十年」『五十人の新聞人』電通、1955年、108頁。
- 48) 井上謙三郎『大連市史』大連市役所、1936年。第750-751頁、前掲、「大連彩票私見」参照。
- 49) 前掲、「大連彩票復活論」。
- 50) 関東局、前掲書、761頁；伊藤武一郎、前掲書、509頁；前掲「大連彩票私見」。
- 51) 伊藤武一郎、前掲書、509頁。
- 52) 前掲『関東都督府施政誌』、325頁。
- 53) 前掲「大連彩票私見」。

- 54) 郭鉄庄・関捷『日本植民統治大連四十年史』(下)、社会科学文献出版社、2008年。991頁。
- 55) 1906年6月に、1万号、1号4円、頭彩1万円以下総彩金3万4千円とし、同年10月、1万5千号、1号4円、頭彩2万円以下総彩金5万1千円とした。
- 56) 前掲「大連彩票私見」。
- 57) 井上謙三郎、前掲書、750-751頁。
- 58) 「彩票局の現状」1910年6月29日付『満日』。
- 59) 「JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. C06092155000、明治42年 公文備考 卷13文書4止 (防衛省防衛研究所)」「関東州ニ於ケル彩票ニ関スルノ件」明治42年4月10日 (第7-8画像目)。
- 60) 前掲、「関東州ニ於ケル彩票ニ関スルノ件」明治42年4月10日 (第10-11画像目)。
- 61) 関東局、前掲書、762頁。
- 62) 前掲、「大連彩票復活論」。
- 63) 前掲、「関東州ニ於ケル彩票ニ関スルノ件」明治42年4月10日 (第7-8画像目)。
- 64) 「彩票開き 待ち設けた開彩 彩票党の大失望」1908年8月18日付『満日』。
- 65) 「第37回彩票抽籤結果」1908年9月6日付『満日』。
- 66) 「空中楼阁消失 大連宏済彩票最終日」1915年4月3日付『満日』。
- 67) 「予想投票 頭彩は何番か」1907年12月15日付『満日』。
- 68) 「頭彩は何番か」1907年12月19日付『満日』。
- 69) 「予想投票 第27次彩票 第式彩は何番か」1908年1月2日付『満日』。
- 70) 「投書箱設置」1908年8月2日付『満日』。
- 71) 「彩票の密輸出」1910年2月13日付『満日』。
- 72) 同上。
- 73) 前掲、「関東州ニ於ケル彩票ニ関スルノ件」明治42年4月10日 (第12画像目)。
- 74) 前掲、「関東州ニ於ケル彩票ニ関スルノ件」明治42年4月10日 (第9-10画像目)。
- 75) 「JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. C06084905700、明治43年乾「貳大日記2月」(防衛省防衛研究所)」「軍人軍籤買収の件」明治43年1月7日。
- 76) 関傑「論清末彩票」『近代史研究』中国社会科学院近代史研究所、2000年、40-52頁参照。
- 77) 「彩票禁止と影響」1910年6月29日付『満日』。
- 78) 「彩票継続運動」1915年2月19日付『満日』。
- 79) 前掲、「大連彩票復活論」。
- 80) 前掲、「彩票継続運動」。
- 81) 関東局、前掲書、762頁。
- 82) 塚瀬進『満洲の日本人』吉川弘文館、2004年、178頁。
- 83) 松阪市編纂委員会編著『松阪市史』(第11巻 史料編 近世1 政治) 蒼人社、1982年。367頁。
- 84) 「第二回台湾彩票当籤者」『朝日新聞』、1907年2月6日。
- 85) 「台湾彩票当籤者の失敗」『朝日新聞』1907年3月15日、「五万円の台湾彩票大阪人に当る (盗み出しの訴訟とりまの大騒ぎ)」『読売新聞』1907年3月15日。
- 86) 「台湾富籤大検挙 (大阪)」、『朝日新聞』、1907年2月10日。
- 87) 「彩票売買者入監 (大阪)」『朝日新聞』、1907年3月9日。
- 88) 「市内彩票大検挙始まる」『朝日新聞』、1907年3月11日。
- 89) 「第二回彩票検挙 (大阪)」『朝日新聞』、1907年2月21日、「市内彩票大検挙の状況」『朝日新聞』、1907年3月13日、「市内彩票検挙談」『朝日新聞』、1907年3月14日、「昨日の大捜索 (彩票検挙の為め)」『朝日新聞』、1907年3月15日、「陸軍部内の捜索 (大検挙起らん)」『朝日新聞』、1907年3月15日参照。
- 90) 前掲、「大連彩票復活論」。
- 91) 「台湾の富籤案」『朝日新聞』1906年6月11日。
- 92) 「台湾富籤の流毒」『朝日新聞』1907年3月14日。
- 93) 「論説 彩票に就いて」1912年2月29日付『満日』。
- 94) 前掲、「大連彩票復活論」。
- 95) 上記同。
- 96) 山本武利「草創期のメディア・イベント」津金澤聡廣『近代日本のメディア・イベント』同文館、1996年、32頁。
- 97) 石田龍蔵『世相百態 明治秘話』日本書院、1927年、40頁。
- 98) 満日初代社長の森山守次は創刊号の「発刊之辞」で「(前略) 我満洲経営の急先鋒……故に挺身満洲経営の急先鋒たるに於いても (中略) 日清両国の (中略) 提携相護の啓発に欠く可からざるを認識す、満洲の生命は一に懸ってこの調和に在り……」と述べた。
- 99) 「創刊より現在に至る」1921年11月3日付『満日』。

付録 『満洲日日新聞』「大連彩票」関係記事標題一覧表

日付	見出し
1907年11月8日	台湾彩票前途
1907年11月30日	営口の彩票当籤者
1907年12月15日	予想投票 頭彩は何番か
1907年12月24日	彩票抽籤は愈々本日
1907年12月26日	彩票予想投票者に告ぐ
1907年12月27日	彩票当籤者の大喜び
1908年1月2日	予想投票 第二十七次彩票 第貳彩は何番か
1908年1月10日	論説 大連彩票問題
1908年1月13日	彩票収益利用法
1908年1月28日	好運の人酒井末松氏 彩票第二彩予想投票正答者
1908年2月4日	彩票が抵当の質屋
1908年2月26日	宏済局彩票の好況
1908年3月1日	彩票購買者謹告
1908年3月24日	言論 大連彩票の前途
1908年4月1日	大連宏済彩票局 広告
1908年4月15日	台湾彩票の前途
1908年4月17日	宏済局彩票に就いて
1908年4月23日	宏済彩票局の計画事業
1908年5月4日	宏済善堂天後宮の設置
1908年5月11日	第三十二次彩票売れ切
1908年5月13日	彩票昨今の悪弊と当局
1908年6月20日	雑報 彩票の増発行
1908年6月20日	彩票の落ちた処
1908年7月17日	滑稽 彩票当違ひ物語
1908年8月18日	彩票開き 待ち設けた開彩 彩票党の大失望
1908年9月13日	謡曲 彩票魔
1908年9月19日	彩票熱漸く低下
1908年9月27日	社会電報 頭彩の行衛（鉄嶺）
1908年10月25日	彩票存廢問題
1908年11月18日	大連小観 彩票
1908年12月25日	彩票開きの繰り上げ
1909年1月3日	糠悦び彩票物語
1909年4月8日	彩票男の末路
1909年4月10日	彩票男の末路
1909年4月28日	彩票買占の弊
1909年5月1日	開彩日付に就き急告
1909年5月1日	彩票買占の取締 内地持行は嚴禁
1909年5月2日	遼陽から彩票買占

1909年5月31日	台北の彩票検挙
1909年6月5日	彩票局の寄附 慈恵病院へ五千円
1909年6月16日	彩票悶着後聞
1909年6月18日	一万円の俄長者 三百円の酌婦に振られる
1909年6月20日	遼陽彩票悶着続聞
1909年9月13日	彩票局の不埒
1909年10月24日	清国富籤発行
1909年10月30日	頭彩珍聞 安東県
1909年11月18日	宏済善堂とは 何
1909年11月19日	二彩当の俄大尽 同職に娼妓と落籍で嫁す
1910年2月13日	彩票の密輸出
1910年6月5日	彩票禁止交渉
1910年6月29日	彩票禁止と影響
1910年6月29日	彩票局の現状
1910年7月13日	浙江省の彩票禁止
1910年8月14日	清国彩票の運命
1910年9月28日	上海の彩票厳禁
1910年10月8日	彩票買いに渡航
1911年1月12日	大連宏済彩票局
1911年1月29日	家庭 頭彩
1911年2月20日	彩票男の末路 太三郎又三助となる
1911年4月13日	又も二彩の悶着
1911年8月28日	彩票売りの取締
1911年10月8日	営口電報 彩票売買禁止
1913年10月10日	彩票の研究
1914年12月13日	歳末の五千円
1914年12月23日	彩票後日物語
1914年12月24日	彩票の贗物 鉄嶺市中に現はる
1914年12月25日	彩票継続運動 奥地より起る
1914年12月27日	彩票の延期は絶対に不可能
1914年12月29日	贗造は日本人 贗彩票の犯人検挙
1915年1月22日	彩票の運命 三月限り断然禁止
1915年2月11日	彩票贗造判決
1915年2月19日	彩票継続運動
1915年2月19日	支那彩票流込 大連彩票廃止の影響
1915年3月4日	彩票愈本月限
1915年4月2日	第一分教場 彩票局跡へ二百名
1915年4月3日	空中楼阁消失る
1916年3月11日	大連彩票復活論



# The Role of the *Manshū Nichinichi shimbun* in the Concession City of Dalian: A Content Analysis of Coverage of the Dalian Lottery

RONG Yuan

SOKENDAI (The Graduate University for Advanced Studies),  
School of Cultural and Social Studies,  
Department of Japanese Studies

*Manshū Nichinichi shimbun* (*Man Nichi*, for short) was first issued on November 3, 1907, and became the largest circulated newspaper in Japanese in Northeast China, continuing to be published until 1945, the defeat of Japan. This newspaper, based in Dalian, reported on aspects and trends of both the Japanese communities and Chinese communities all over Northeast China. Furthermore, it contained much information which could not be obtained in Japan itself. Therefore, as an indispensable general picture of “Imperial Japan” and as an illustration of the actual state of the Northeast China community during this period, it is considered material of high historical value.

It is hard to construct an authentic history of modern Japan without treating its invasion, occupation, and colonization of the Asia-Pacific countries and regions. As a widely read Japanese newspaper in Northeast China at that time, *Man Nichi* not only contains facts that could not be perceived by the media of China, but also includes details which the Japanese domestic media were in no position to grasp. Moreover, if we consider the integrally preserved condition of *Man Nichi*, which is rarely seen among the extant periodicals of the period, I believe that by reexamining this newspaper we can excavate historical facts which have been neglected until today related to understanding the social conditions and trends of Japanese and Chinese communities in Northeast China.

This paper will take the newspaper’s coverage of the Dalian lottery problem, which has been completely ignored up to now, as a subject of study. By examining the pages of *Man Nichi* tracking stories about the lottery from its beginning in 1905 to its discontinuation in 1915, I intend to examine the following aspects: (1) What kind of editorials did *Man Nichi* publish in relation to the Dalian lottery? (2) What kind of role did *Man Nichi* perform in the development process of this lottery?

**Key words:** *Manshū Nichinichi shimbun*, Dalian, *Liaodong shinpo*, *Dalian Shimbun*, Kwantung Leased Territory, Dalian lottery